

前号作品短評A 〈小野澤〉

●右目だけ涙が溜まるわれの目をそのままにして一年半過ぐ

布宮慈子

不調があってもただちに受診するという風にはなかなかいかないものだ。内容にもよるが、じぶんにもドライアイで受診するのにそこその時間経過があった。年とともに変化はあらむ(二首目)、や(ドライアイよりまし)(三首目)、いろいろ考えることになる。それは次のような決意が必要になるまでの時間でもある。

溜まりある涙の量と頑固さを天秤に掛けつひに決意す

眼科はクリニックの数が少ない。ここでは、新しき眼科クリニック(六首目)。

初に行く眼科のアンケートに答へれば十年も行かぬ訳を問はれて

初診の問診票か。診察自体は淡々とした記述。通水検査というのをする。服薬処方された。受診は大きなことになる。おお事なのだ。診察が終わっての安堵感、十首目がいい。

桜桃の季節は梅雨と重なれば眼科出で来て空を仰ぎぬ

●スカイツリーの真向いに来て停泊し横に満月出できて見放く

市川茂子

停泊し、は屋形船で、隅田川船清の棧橋を出て、橋(を)巡り、「東京港」レインボーブリッジをめざすものか(二首目)。一首目にあるように、今の言葉で屋形船クルージング、その体験が一連前半の七首になっている。(スカイツリーの)真向い、(横に)満月が詠みどころでもある。すぐ横にみえるというもの。船上で楽しむところから、お月見の歌でもある。(見放く、は他力下二、遠くを見る)。

日の落ちて酔客にぎわう船内は出来たての料理配られてゆく

作者は、屋形船ではごちそうを食べることが楽しみだった、と号末の短信に書く。また、ここが大事のところだが、最後の晚餐のような気分で心残りなく食べられた、とも。

また梅雨近き雨の歌。デイサービスの歌でもある。それも本人のもの。

デイサービス休みたいような今朝の空梅雨近き雨しとど降りいて

●サ、サーッと植込みより走り出る顔赤き雉の緑羽輝る

梅津純子

一連は「四つ切白菜」。うしろの二首がそう。この歌は、なか(ごろ)の三首の真ん中のうたで、公園の植込みを向いて膝をついている若者の(もつ)カメラ、これがその一首目、その狙い、対象が雉、その雉の様子が直接に描写されたもの。動きがある。よくみている。鮮やか。輝る、はひかる、と読んだ。

薄紅の牡丹のやはき花びらに重たげに降る晩春むとばるの雨

雨の牡丹が詠われた後半中の三首、そのこれも真ん中のもの。雨の重さという感覚に独特なものがある。当市市の花が牡丹で、牡丹園もある。大抵連休前の四月半ばには咲いている。開花はその土地の季節感覚になる。

ところで、白菜は、もう余りまるごとでは売られなくなった。じぶんも手に取るのは四つ切り。厨べはじぶんのよくしっている場所である。下旬にするどいものをみる。

厨べに春を知るらし四つ切の白菜の芯青く立ちくる

前号作品短評B 〈慈子〉

●空へ空へ緑の梢しならせて公孫樹は立てり最後の初夏に

大橋千佳子

理由はわからないが、敷地内にあるイチヨウを切ることになった。そのイチヨウの木への感謝を

述べた一連だ。いざ切る段階になっても諦めきれない思いは残る。イチヨウの生命力の強さを感じながら、せめて感謝の気持ち伝わるようにと精一杯のことをして木の命を終わらせようとする。「ビロードよりシリコンに似た手触り」は作者独特の感覚だろう。

安らかな最期であれと祈るごと若き樵は良策を練る

ビロードよりシリコンに似た手触りに億年生きる葉の強さ知る

お清めの酒の匂いをまといつつ樹は薪へと切り分けられぬ

きちんと手順どおりに伐採してもらった後は、もはや悩んでなどいられない。次の歌は気持ちの切り替えを表現している。

南西の角の空虚に西日差すほぼ真円の切り株すがし

●このわれに一日すぎたるその一日一日にひとつチョココロネ食ぶ

小野澤繁雄

チョココロネを一つ食べるのが日課になっているのだろうか。確かに懐かしく、おやつにはもってこいの甘いパンである。チョココロネの形状がかわいらしく、また郷愁も感じとれる一首。「食ぶ」は、「とうぶ」ではなく「たぶ」と読みたい。「チョココロネ」を調べてみると以下のようである。

コロネは、日本で開発された菓子パンの一種である。パン生地を円錐形の金属製芯（コロネ型）に巻き貝状に巻きつけて焼き上げたのち、内部にクリームを詰めたもの。コロネとも呼ばれる。チョコ

コレートクリームを入れるとチョココロネ、カスタードクリームを入れるとクリームコロネとなる。フランス語で「角(つの)」を意味する「cornet (コルネ)」「もしくは英語の「cornet (コルネット)」という金管楽器にちなんで付けられたと考えている。明治時代からあったといわれているが、考案者は明らかになっていない。(ウィキペディア)

全体は、歩きながら見えてくるもの、季節の変化を丁寧にすくいとって描写している。題は「一日」であり、ほかの歌にも「第二公園」「一青年」「工場にたてる三本」などの数詞が使われ、一種の遊び的な要素のある一連となった。

● ゆくりなく圧迫骨折かうむりて安静七日後の起立に「わたくし」

河村郁子

「ゆくりなく」は、思いがけず、不意に、の意味。思いもかけないことに自分が圧迫骨折になってしまった。安静にして七日が過ぎ、立ち上がってみると、やっと自分が取り戻せた。こう解釈できるが、カギ括弧つきの「わたくし」の受け取り方がポイントだろう。

退院後は介護認定規定にて訪問リハビリ週二回受く

初対面の理学療法士は二十代 名は旅人とぞ 畏れ多かり

作者は自宅でリハビリを受けることになった。若い理学療法士の旅人さん。「畏れ多かり」といっているのは、万葉集の代表的な歌人・大伴旅人を意識してのことである。リハビリを受けるほうも

少し余裕が出てきたようだ。筋力をつけるのが最善とのことで、しっかりした指導のもとにリハビリをしている作者。必ずや治るに違いないと思わせるのは、前向きな姿勢が伝わってくるからだ。

当を得る利発な指導に苦手なる片足立ちにも挑戦すなり

● 冥途の土産 誘われゆくカヌーツアー

新野祐子

カヌーツアーに誘われて行ってみた作者。次の句は自分自身へのアイロニーである。ダムを造る前は、反対していたのだろう。しかし、掲出句の「冥途の土産」という表現により、そう思ったのか、誘った人が言ったのかは不明だが、「ダム反対派」だった作者の内面が微妙に変化しているのを感じる。

パドル漕ぐダム反対派ダム湖かな

詞書の「難病の友を囲みて三句」の中の句は、なかなか苦しい場面である。

短夜や思いに言葉追いつけぬ

手土産は粽祈りの容せり

ここにも一連の題「土産」が関連している。難病を患っている友に季節がら粽(ちまき)を持っていたのだが、そのかたちが祈りのようにだと気づく。粽は作者の気持ちそのものだ。両手にのせた粽が見えてくる。この表現は誰にもできない、胸に迫る発見である。